

<目的>近年、つかい過ぎによるスポーツ傷害だけでなく、遊び場の減少やゲームの普及等を背景にした運動不足による子どもの運動器機能低下をきたした状態が問題になっている。SLOCではいち早く、ウェブサイト等を通して、ロコモ対策には子どもからの運動・食事対策が重要であることを訴えてきた。昨年の本学会では、その実態について報告したが、さらに平成28年度より導入される学校運動器検診に向けたより効率的な検診システムについて検討した。

<方法と結果>さいたま市の学校健診では、新しい試みとして平成26年度より「側弯症」問診票を作成し、事前に保護者にチェックしてもらう方法を取り入れた。埼玉県医師会運動器検診委員会が行うモデル事業では、さらに保護者による運動器事前チェック5項目を追加し、「側弯症」問診票（表面）・運動器チェック5項目票（裏面）を検診に先立ち保護者に配布し、記入してもらうこととした。当日は運動器検診医が問診票・チェック項目票をもとに運動器検診を行い、その後保護者チェックと検診医診断にどのくらい乖離があるのか比較検討を行った。保護者と検診医のチェックシートを比較検討した結果、一致率は6～8割と高率であった。すなわち運動器機能は目で見えるため、簡単な機能チェックであれば保護者によるスクリーニングが可能であることを示唆している。

<考察と結論>子どもの身体の健康を守る基本は家庭であり、子どもの運動器について先ず保護者にチェックしてもらうことは、検診システムの効率化だけでなく、ロコモ予防にもつながる。学校や医療機関だけでなく、家庭、社会が一体となって子どもの運動器を支えるシステムを構築する必要がある。